

いるま歴史ガイドマップ

～歩いてみよう西洋館とその周辺～



入間市の西洋館と言えば、旧石川組製糸西洋館です。これほど立派な建物がなぜ入間市にあるのか？西洋館とその周辺に残る文化財を歩いてめぐり、いるまの歴史を探ってみましょう。

製糸業の要・女工さん「おかせぎなさい」

製糸業では、優れた視力と集中力を持ったベテラン女子工員を毎年確保できるかが業績を左右するほど重要だった。実家の家族に信頼してもらい、女工として送り出してもらうのは大変だった。石川組製糸では苦労の末、信頼を得られた山梨県から多くの女工が来てくれたため、工場内では甲州弁が飛び交っていた。

また、本店工場内で誰しも挨拶代わりに使った「おかせぎなさい」という言葉には、ともに働こうという気分が現れていて、工場内であれば味わえない、よい気持ちになったという。



写真提供
小関京子氏



クリスマスや工場対抗の運動会などの行事もあった。また、夜学校や家庭学校が開かれ、裁縫・珠算・読み書きのほか英語なども教えていた。

石川家とキリスト教

石川家のキリスト教信仰は、石川和助が英語学校でキリスト教に出会い、洗礼を受けたことに始まる。最初、父金右衛門や兄幾太郎は怒り、和助は勘当されてしまう。しかし、信念を持って活動する和助の姿に母だいや父の気持ちも次第にほだけていき、やがて家族全員が改宗した。

石川家の家憲には、「キリスト教の主義精神を以て根本要義となす」とあり、経営にも影響していた。

石川組製糸の女工たちも礼拝に参加していたが強制ではなかった。讃美歌を歌うことも好きだったという。



石川組・石川家の様々な活動

西武鉄道池袋線の前身である武蔵野鉄道は、大正4年（1915）に蒸気鉄道として開通した。その経営には、幾太郎が取締役、第3代社長として参画するとともに、石川家の人々も株主として鉄道経営を支えた。

石川家は、地元小学校へ雨天体操場を寄付するなど教育への支援を積極的に行った。また、豊岡公会堂の用地や豊水橋の改修工事費を豊岡町へ寄付するなど、社会貢献も行った。



大正11年に豊岡町で撮影された蒸気機関車
増田昌己氏撮影



豊岡小学校雨天体操場
(昭和40年撮影)

小説「大地の園」の舞台を楽しむ



信成社 著者：打木村治
挿絵：武部本一郎

石川組製糸で働く女工の姉を持ち、石川家の人々と交流のあった作家打木村治が自身の川越中学時代の出来事をモデルにして執筆した児童文学小説。物語には、西洋館や石川組製糸の本店工場、新道の家「あーちゃん」、霞川の土手や当時走っていた馬車鉄道などが登場する。村治の姉、国代が女工の立場から石川家の若い副社長と結婚するシンデレラストoryも描かれている。

西洋館の周りを歩くと、物語の世界が広がっている。

市指定文化財「石川組製糸関係資料」

石川組製糸では、解散後、経営に関する資料のほとんどが失われ、当時の状況を知る手掛かりは限られている。その中で令和2年に「石川家土地台帳」「石川家芳名帳」「筑前石川組製糸関係書簡群」「石川忠雄家文書」の資料群が、入間市の指定文化財になった。4つの資料は、それぞれ石川組製糸の経営方針や工場の様子、経営者である石川家の交友関係など、往時の石川組製糸の状況を物語るものであり、これらを調査・研究していくことで、石川組製糸に関する新たな事実が明らかになるかもしれない。



石川家土地台帳



石川家芳名帳



筑前石川組製糸関係書簡群



石川忠雄家文書

「いるま歴史ガイド～旧石川組製糸西洋館と周辺の文化財」



このマップに載っている建物や史跡などについては、スマートフォンやパソコンでさらに詳しい説明を見ることができます。貴重な写真やエピソードも満載です。

<https://www.alit.city.iruma.saitama.jp/irumashiseiyoukan/>



発行 入間市教育委員会
問合せ先 入間市博物館アリット
〒358-0015
埼玉県入間市二本木100番地
TEL 04-2934-7711



①旧石川組製糸西洋館 国登録有形文化財（建造物）

国道16号沿いにあり、壁の煉瓦調タイルが目を惹く西洋館。CMやドラマのロケ地としてもよく使われるため、それとは知らずに目にしていてもいるかもしれない。

石川組製糸の創業者、石川幾太郎が取引先のアメリカの貿易商を招くに当たり、「豊岡をみくびられてはたまらない。超一流の館を造って迎えよう！」と決意して建設したと伝わる。建物としての見ごたえもあり、当時の入間市の繊維業と石川組の繁栄を知ることができる歴史的遺産である。大正10年（1921）上棟。

公開日は、入間市博物館アリットへ問合せ



What's 石川組製糸？

石川組製糸は、石川幾太郎が明治26年（1893）に創業した製糸会社である。当初はわずかに20釜の座繰製糸（手工業）でスタートしたが、明治27年にはいち早く蒸気力を利用した機械製糸に切り替え、日清・日露戦争の戦時景気に乗って瞬間に経営規模を拡大した。

入間市に3工場、狭山市・川越市・福島県・愛知県・三重県・福岡県に工場を持つ全国有数の製糸会社に成長した。横浜港からの生糸の出荷高で全国6位を記録したこともある。しかし、関東大震災による商品の焼失、金融恐慌や化学繊維の誕生におされて徐々に経営が悪化する。経営の羅針盤であった弟・龍蔵と幾太郎の死も追い打ちをかけ、昭和12年に会社は解散することとなった。



石川組の半纏



本店工場内の様子



石川幾太郎

②石川洋行事務所・蔵



2階建ての日本家屋は石川組製糸本店工場内にあった事務所棟を移築したもの。蔵は、大正7年（1918）に建てられた3階建ての土蔵。幾太郎の二男権吉が中国での繭の買い付けで利益を得て建てた。現在はイベント会場などに使用されている。

③新道の家



石川組製糸の本店工場場で女工総監督として慕われていた石川つめ（あーちゃん）の住んでいた家。隣に歌人石川信雄も住んでいた。つめは、小説「大地の園」にも登場する。現在も住宅として使われており、隣が洋菓子店となっている。

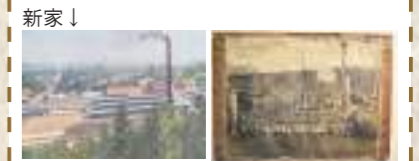
④武蔵豊岡教会



W.M.ヴォーリスが設計した大正12年献堂の教会堂。石川組同族会が土地と建設費の一部1万円を提供した。当時は製糸工場の女工が通い、いまも礼拝が行われている。

⑥石川組の工場跡

本店工場は、家族経営の座繰り製糸から始まり、機械製糸に転換した。会社の中核工場として約1,200人が働いていた。第二工場（新家工場）は明治35年に完成した。第五工場は扇町屋に造られ、通称「ゴコウバ（五工場）」と呼ばれた。



工場対抗の運動会に参加する↑五工場の従業員たち

⑤ジョンソントン（元の石川農場）

木造平屋建て、三角形の切妻屋根が特徴的な米軍ハウスと呼ばれる建物を活かした住宅や店舗が建ち並ぶスポットになっている。かつてこの地は、石川組製糸工場で働く大人数の従業員のための食糧を生産する農場だった。戦後、進駐軍の将校向けの住宅地となった。